

第十六章 韓國問題並日露協約

第二回平和會議ト韓國密使ノ策動

第二回平和會議ノ開カレテ居ル最中、韓國皇帝ノ密使ガ海牙ニ來テ會議ニ陳情シヨウト試ミタガ、單ニ目的ヲ達シ得ナカツタノミナラズ、却テ韓國皇帝ノ讓位ヲ招來シタ事件ヲ簡單ニ紹介スルガ、韓國皇帝ト云フヨリハ寧ロ皇帝ヲ取卷イテ喰物トシテ居ル連中ハ、明治三十五年以來連リニ對外策動ヲ試ミ、專ラ露佛ニ倚ヨリ韓國ノ獨立恢復ヲ旗幟トシテ、私腹ヲ肥ヤシテ居タ。露佛兩國ノ總領事ハ此交渉アル毎ニ、之レヲ本國政府ニ報告シ、訓令ヲ受ケテハ諾否ノ返事ヲスルヲ常トシテ居タ様ダガ、第二回平和會議ニ此運動ヲ採リ上ゲテ貰ハンモノト、米人「ハルバート」ニ多額ノ金圓ヲ與ヘ、鮮人數名彼ニ件ヒ、西比利亞經由歐洲ニ出發シタ。此計畫モ亦露佛總領事ニ内報サレ、兩國政府ノ斡旋ヲ求メタガ、佛國總領事ハ其愚策タルコトヲ告ゲテ之レヲ拒絕シタ。「ハルバート」ハ露京デ外務大臣ニ面會ヲ求メタガ斷ハラレ、ソシテ平和會議ハ陳情ニ關スル一切ノ請願ヲ採リ上ゲヌコトニ決定シタノデ、此運動ハ全ク手モ足モ出ナクナツタ。

平和會議ノ不接受決定

第一回平和會議ノ議事規則ニハ其冒頭ニ、會議ハ豫メ議題トシテ承認セラレタル諸問題ノ外、他ノ如何ナル事項ヲモ審查スルノ權限ナシ、トノ大原則ガ掲ゲテ在ツタノニ反シ、第二回平和會議ノ議事規則ニハ何等類似ノ規定ガ無イ、之レニハ甚ダ經緯ノ在ルコトデ、露國ノ會議招請廻章ニ接シタ米國ハ、議題中ニ平和會議ノ最モ重要ナル使命タルベキ軍備ノ制限乃至縮少ニ關スル討究ガ豫見サレテ居ラヌノヲ非難シ、本件ト共ニ債權行使ノ爲メニ兵力禁止ノ問題ヲモ議題ニ加ヘンコトヲ要求シ、英國及西班牙モ軍縮問題ノ討究ヲ望ミ我國ハ招請ヲ受諾スル際、議題中ニ豫見サレテ居ラヌ事項デモ討究ニ値スルモノガ在ルト思フト述べ、又有効ナ結果ヲ招來シ能ハヌト考察スル事項ノ討議ニハ、之レニ加ハルヲ拒絕シ或ハ其參加ヲ中途辭退スル權利ヲ留保シタガ、露國ハ飽迄其通告シタ議題ヲ討議ノ基礎トセンコトヲ主張スルト同時ニ、此以外ノ事項ガ會議ニ附議セラルル場合、有効ナ結果ヲ期待シ得ズト認ムルトキハ、其討議ニ加ハルヲ拒絕スル權利ヲ、露國モ亦留保スト告ゲ、此ノ如キ事態ノ下ニ第二回平和會議ハ開カレタノダカラ、議事規則討議ノ際既ニ獨、英カラ國際捕獲審檢所ニ關スル提案ヲ爲ス旨ヲ豫告シ、米國ハ契約上ノ債務ヨリ生ズル紛争ノ爲メニ兵力ノ使用ヲ制限スルノ條約案ヲ提出スルノ意アルヲ告ケタガ、此議題ニ關スル爭議モ亦米國ガ曩ニ述べタ平和會議召集手續ノ改正ヲ必要ト認メタ一原因デ在ル。

以上ノ諸提議ハ何レモ會議ノ使命中ニ包含サレ得ベキ事項デ、之レヲ議題トスルヤ否ヤノ論争ナルニ反シ、

各國間ノ政治上ノ關係又ハ條約ニ依ル既定ノ事態ノ上程ハ、會議ノ性質ニ鑑ミ之レヲ許容スベキ限リデ無イ
露國ガ其招請狀ニ前後二回共之レヲ明記シタノハ至當ノ事デ、假令第二回平和會議ノ議事規則ニ討議事項ノ
制限ガ規定シテ無イニセヨ、各國共之レニ付テ異論ノ在ル筈ハナイカラ、韓國密使ノ不成功ハ頗ル當然ノ歸
結デアル。

韓國皇帝ノ讓位

韓國政府ハ海牙ニ密使派遣ノ事カラ甚タシク我國ノ輿論ヲ激昂サセ、又近イ中ニ林外務大臣ガ渡韓スルト
ノ報道ニ接シテ、事態ノ重大性ヲ自覺シ、進ンデ何等カノ處置ヲ執ラナケレハナラヌト決心シ、連日內閣會
議ヲ開イタ末、皇帝ノ讓位ヲ斷行スルノガ最モ事宜ニ適シテ居ルトノ結論ニ達シタガ、之レヲ行フニ當リ我
統監ノ助力トカ同意等ヲ求ムル様ナコトヲセズ、自力デ斷行スルノガ至當ダト云フニ定マツタ。然シ韓國皇
帝ハ伊藤統監ノ意見ヲ求メタ上ニシタイト考ヘラレタモノト見エ、統監ニ參内スル様再三懇望サレタノデ、
統監ハ七月十八日謁見シタラ、皇帝ハ密使事件ノ辯疏後讓位ノ件ヲ下問サレタガ、統監ハ此ノ如キ韓國皇室
ノ重大事件ニ、其臣僚デ無イ者ガ是非ノ奉答ヲシタリ、又ハ干與スベキ筋合デナイト斷然辭退スルト同時ニ
此件ニ付當局大臣等カラ少シモ相談ヲ受ケタコトハ無イト附ケ加ヘタ、其夜皇帝ハ大臣元老等ノ意見ヲ徵シ
十九日午前三時讓位ノ詔勅ハ發セラレタ。

「ブランソン」露國總領事認可狀問題

其頃京城ニ居タ露國總領事ハ「ブランソン」ト云フ人デ、「ボーツマス」會議ニモ書記官トシテ列席シタ極
東通ダ。明治三十八年十一月ノ日韓協約デ我保護權ガ確立シタ翌年ノ春、同氏ノ委任狀問題デ相當我當局ノ
神經ヲ刺戟シタ事件ガアル。是レハ露國政府ガ出シタ最初ノ委任狀ハ韓國皇帝宛ダツタカラ、我國カラ異議
ヲ唱ヘタ結果今度ハ日韓何レノ皇帝ノ宛名モ無ク、唯「ブランソン」氏ヲ韓國駐在ノ總領事ニ任命シタカラ
其承認ヲ乞フト云フ委任狀ニ改メ、此形式ハ外國ノ例ニ倣ヒ新タニ作ツタモノダト露國側デハ釋明シタ、然
シ本問題ノ發生當時「ラムズドルフ」外相ハ列強ニ向ツテ、在韓外國領事ニ認可狀ヲ附與スル主體ハ、日本
政府ニアラズシテ韓國政府デ無ケレバナラヌ、露國政府ハ日韓協約ヲ承認シタコトハナイ、又日露戰爭前ニ
締結サレタ露韓兩國間ノ諸條約ハ依然有効ダト云フ趣旨ノ意見ヲ表示シテ居ルカラ、此根本問題ヲ解決セス
ニ、只前ニ書タ様ナ釋明丈ケデ、新シイ委任狀ヲ受ケ入レルコトハ、日本政府トシテ到底不可能デアル。ソ
コデ七月一日林外相ハ「バクメチエフ」公使ニ、此露國ノ態度ハ領事認可狀問題ニ關聯シテ韓國ニ對スル我
國ノ地位ヲ沒了セントスル底ノ企圖ト見ルノ外ハナイガ、韓國ノ形勢如何ハ常ニ日本安危ノ係ル所デアルカ
ラ、認可狀問題ヲ解決スルニ當ツテ事ヲ曖昧ニ處理シ、韓國ニ對スル我保護ノ存否ヲ論議スル餘地ヲ他日ニ
殘ス様ナコトハ斷ジテ出來ヌ、就テハ露國政府ガ「ブランソン」氏ニ對スル認可狀ヲ日本政府ニ請求スル公文
ニ、我國ガ韓國デ適法ナ保護權ヲ有ルスコトヲ承認スル旨ヲ明記シ、又日露戰爭前締結シタ露韓兩國間ノ諸

條約ハ一切消滅シタカラ、新タニ條約ヲ締結スル爲メニ談判ヲ開カンコトヲ我國カラ申出タトキハ、必ズ之レニ應ズルト云フ意思ヲ表明スルナラ、日本政府ハ新タナ形式ノ委任狀ニ對シテ認可狀ニ對シテ認可狀ヲ出スダロウ、ト聲明シタ、此時ニハ「ラムスドルフ」伯ハ外相ノ椅子ヲ去ツテ「イスヴォルスキー」氏彼ニ代ハリ、巴里カラ轉任シタ本野男ガ日露戰後最初ノ公使トシテ既ニ露都ニ着テ居タ。本野公使ハ「イ」外相ニ林外務大臣ガ東京デ露國公使ニ話シタト同様ノ申入ヲシタラ、「イ」外相ハ露國政府ハ各國政府ノ態度ヲ問ヒ合セタコトハアル、「ラムスドルフ」伯ノ時デモ日本ノ權利ヲ否認スルノ意思ハ斷ジテ無カッタノデ、況ンヤ自分ハ初メカラ韓國ニ對スル日本ノ權利ハ、事實ニ於テ既ニ公認スルノ處置ヲ取ツテ來タノダカラ、日本政府デ強テ其保護權ヲ認メルコトヲ認可狀ノ附記スルノヲ要求スルナラ、敢テ之レヲ辭シハシナイガ、露韓條約ノ存否問題ハ國際法上ノ問題デアルカラ、切り離シテ研究シタイ、尤モ「ボーツマス」條約中ニ韓國ニ於ケル露國人ノ待遇方ニ付最惠國條款ノ設ケガ在ルノハ、日本ノ主張ニ有力ナ根據ヲ與ヘルモノカト思ハレルガ、若シ日本政府カラ其主張ノ理由ヲ具體的ニ明示サルレハ、充分公平ニ且ツ調和的精神ヲ以テ之レヲ研究シ、強テ日本政府ノ解釋ヲ否認シ様ト云フ如キ考ハ毫頭ナイト述ベタ。我政府ハ「イ」外相ノ此釋明デ本件ヲ打切ルコトトシ、此意味ノ公文ヲ送ツタガ、其末尾ニ露國領事ガ韓國デ其職務ヲ執行スルノハ、「ボーツマス」條約ノ規定ニ依ルノデ、既ニ無効ノ露韓條約ニ基クモノデハナイト云フコトニ誤解ナキヲ要ストノ一句ヲ念ノ爲メ附ケ加ヘタ、斯クノ如キ經緯ノ後明治三十九年七月二十六日駐日露國公使ハ「ブランソン」氏ガ韓國ニ於ケル露國總領事ニ任命サレタコト、露國政府ハ韓國ノ對外關係ヲ完全ニ監理スル日本政府

ノ權利ヲ認メ、日本國皇帝陛下ヨリ「ブ」氏ニ對スル認可狀ヲ下付セラルル様日本外務大臣ニ請求スベシトノ訓令ヲ接受セル旨ノ公信ヲ林外相ニ送り、玆ニ本件ハ落着シタガ、筆者ノ觀測デハ韓國皇帝宛ノ委任狀ヲ出シタリ等シテ此紛糾ヲ捲起シタ發意者ハ「ブ」氏其人デ、彼ノ對日感情ハ未ダ融和ノ域ニ達シテ居ナカッタカラ、其京城駐中韓國側ノ陰謀ニモ喜ンデ携ハツタノデアル、彼ハ其後本省ノ極東局長ニ轉シ明治四十二年筆者ガ露國ニ在勤中其職ニ居ツタ爲メ、何カト不愉快ノコトガ少ナクナカッタガ、大正六年筆者ガ佛國ヘ赴任ノ途中、「ノールウエー」ノ「ベルゲン」カラ「スコットランド」ノ「アバデーン」ニ渡ル船中デ、筆者ハ同氏夫妻ニ邂逅シタ、此時ハ「ケレンスキー」ノ末期デ、彼ハ亡命者トシテ故國ヲ發足シタノダカラ、昔ノ氣魄ハ其餘影サエ留メテ居ラス、筆者ハ餘リノ變リ方ニ感慨無量ダツタガ、彼ガ其時ノヨウナ態樣ヲ以前ニ持ツコトガ出來タラ、幸セシタノハ獨リ我國丈ケデハ無カッタロウト思ツタ。

日 佛 協 約

日佛協約ハ明治四十年六月ニ、又日露第一回協約ハ其七月ニ締結セラレ、是レテ明治三十七八年戰役後兎角圓滑ヲ缺イテ居タ我國ト此兩國トノ關係モ調整サレタ。我國ガ佛國ノ提議ニ應シテ協約締結ノ商議ヲ開クニ決シタ主ナ動機ハ、云フ迄モ無ク一ハ之レニ依ツテ其極東殖民地ノ將來ニ關シテ感シツツアル危惧ノ念ヲ佛國カラ取り除キ、二ニハ印度支那ガ日佛通商航海條約ノ適用範圍外ニ置カレテアル爲メ、同地方デ我國民ハ不法ノ待遇ヲ受ケルコトガ少ナクナイノミナラズ、我通商ノ發展ハ殆ント之レヲ期シ難イカラ、我國ノ

臣民ト商工業トノ爲メニ最惠國ノ待遇ヲ取リ付ケント欲シタ爲メデアル。最初佛國カラ出シタ提案ハ出來上ツタ協約ト同趣旨ノモノデアツタガ、我方カラノ對案ニハ此保障ノ對價トモ見ルベキ前記二ノ趣旨ヲ規定スル第二項ヲ追加シタ、然ルニ最惠國待遇ヲ我商工業ニ與ヘルコトヲ佛國ハドウシテモ承諾セヌノデ、夫ノ宣言書ノ様ナモノニ成ツテシマツタガ、此時カラノ懸案ガ今日ニ至ルモ未タ解決シナイノハ頗ル遺憾千萬デアル(註)日佛協約ノ話ガ初マル前福州ニ居タ佛國ノ「クレイデル」領事ハ、福建省ニ於ケル我各般ノ計畫企業ニ對シテ裏面カラ反對ヲ試ミ、此種ノ策動ハ少ナカラス我利益ト衝突シタ、我國ガ佛國ノ希望ヲ容レテ協約ヲ結フ以上其精神ト矛盾スル行動ヲ許スコトハ勿論出來ヌカラ、此趣旨ヲ明確ニシテ置ク爲メ、福建省ハ協約ニ所謂秩序及平和ノ維持ヲ特ニ希望スル清帝國ノ地方中ニ包含セラレルト云フ諒解ヲ念ノ爲取付ケタガ、今ハ全ク無用ノ心配デ、書キ物ハ反故ト成ツタ。

註、日本ト印度支那トノ關稅條約ハ昭和七年ニ締結セラレ、筆者力之ニ調印スルノ光榮ヲ有シタノハ望外ノ幸福デアル。

第一回 日露協約

日露兩國ノ間ニ協約ガ結ハレタノハ前後四回デ、其孰レモ蘇聯邦ガ之レヲ公表シタカラ、最早周知ノコトデハアルガ、記憶ヲ辿ツテ簡單ニ其經緯ヲ述ヘテ見様ト思フ。

第一回日露協約ハ明治四十年七月三十日ニ調印サレタガ、其前年カラ英露兩國ノ間ニハ協商談ガ行ハレテ居タ。四十年一月駐露英國大使ガ此件デ「イスヴォルスキー」外相ト會見シタ時、同外相ハ日露間ノ和親ガ、

將來永ク渝ラヌト云フ證左ノ得ラレヌ限り、英國ト協定シテモ徒勞タト思フカラ、日本ト話合ヒノ付ク迄英國トノ商議ヲ延ハシタイト語ツタソウダガ、「イ」外相ハ其以前本野大使ニ對シテモ、若シ日本ガ將來ノ平和ヲ保障スル意思ガアルナラ、露國ハ多大ノ讓歩ヲスルニ吝カデナイト告ケタコトガアル。當時我國ガ露國ニ恐怖ノ念ヲ起サセル様ナ態度ヲ執ツタリ又行動ヲシタコトハ毫モ無イノデアルガ、露國側デハ何トナク日本ノ再襲ヲ懸念シテ居タニ相違ナイ。斯クノ如キ疑心ヲ露國ニ懷カシテ置クノハ、少シモ侵略戰ヲスル意思ノ無イ我國ニ取ツテ頗ル不得策デアルノミナラズ、進ンデ露國トノ親交ヲ敦クスルノハ、極東恒久ノ平和ヲ保障スル上ニ極メテ必要ダカラ、我政府ハ先方ヨリ提議シテ來タラ交渉ヲ進メルコトニ廟議ヲ決シタ。其後二月四日本野大使ガ寬城子問題デ「イスヴォルスキー」外相ヲ訪問シタラ、同外相ハ自分ノ希望ハ目下懸案ノ此條約ヲ満足ニ締結スル丈ケデナク、日本ト將來永久ニ眞實和親ノ關係ヲ保持シ得ル基礎ヲ確立サセ度イノデアル。滿洲撤兵ノ期ヲ早メタノモ亦此平和政策遂行ノ一端ニ外ナラヌノダガ、露國ニモ日本ノ様ニ慷慨家ガ少ナクナイ、從ツテ自分ノ平和政策ヲ悅ハヌ者モ相當ニアル。然シ自分ハ露國將來ノ長計ガ、一方ニ日本トノ和親ヲ堅クシ他方ニ英國ト妥協ヲ結ビ、依ツテ以テ世界ノ平和ヲ維持シ專ラ國力ノ休養ニ勉メ、露國外交政策ノ中心ヲ其本領タル歐洲ニ復歸スルノニアルト考ヘテ居ル。此意見ハ幸ヒ閣僚ノ贊成ヲ得、皇帝ノ裁可モ經タノデ、之レニ對スル輿論ノ歸趨如何ヲ知ル爲滿洲撤兵期ヲ繰上ケテ見タノデアルガ、一二ノ異論ヲ除ク外民論ノ迎合ヲ得タノハ愉快ニ堪エヌ、即チ自分ノ政策ガ今ヤ露國朝野ノ支持ヲ得テ居ルトノ確信ハ出來タガ、日本ガ果シテ眞摯露國ト和親ヲ結フ氣ガアルカドウカ懸念スルト述ヘタ。本野大使ハ之レニ對シテ

自分モ亦日露ノ關係ガ將來益々親睦ヲ加フルハ、極東平和ノ爲、隨ツテ又日露共通ノ利益ノ爲、必要缺ク可ラストノ意見ヲ有スルモノデアルガ、露國ハ何ノ理由ニ依ツテ日本ニ禍心アリト疑フヤ頗ル了解ニ苦マサルヲ得スト同時ニ、如何ナル保障ヲ得バ露國ハ安心スルコトガ出來ルノカト試問シタ。「イ」外相ハ露國ハ極東ニ於テ今日有スル地位ヲ將來ニ維持セントスルノ外他ニ何ノ野心モナイ、詳言スレハ露國ガ現在極東ニ有スル樺太島ノ北半及太平洋沿岸ノ所領ヲ侵害サレザル保障ヲ得レバ、露國ハ日本ガ戰爭ニ依ツテ得タ一切ノ果實ヲ全然承認シ、將來決シテ之レヲ爭ハスト云フ保障ヲ與ヘルニ躊躇セヌ、幸ニ此趣旨ノ協約ヲ結ヒ、日露兩國間ニ永遠ノ平和ノ基礎ヲ確定スルコトガ出來タナラ、自分ハ何時、外務大臣ノ職ヲ去ツテモ遺憾デナイト述べ、其月發行ノ「コンテンポラリー」、レヅキユ」ニ出テ居ル「デロン」氏ノ論說「露西亞及日本」中ニ書テ在ル日露親善基礎案ハ大體自分ノ考案ト一致シテ居ルト附ケ加ヘタ。第一同日露協約ノ交渉ハ斯クノ如クニシテ開始セラレ、二月十八日露國ガ最初ノ協約案ヲ提出シテヨリ折衝ヲ重ヌルコト五個月有半、七月三十日漸ク其妥結調印ヲ見タ、當時公表サレナカツタ協約ハ三條ヨリ成リ、左ノ通りデアル。

日本國皇帝陛下ノ政府及全露西亞國皇帝陛下ノ政府ハ滿洲、露國及蒙古ニ關シ、一切紛爭又ハ誤解ノ原因ヲ除去セムコトヲ欲シ、左ノ條款ヲ協定セリ。

第一條 日本國ハ滿洲ニ於ケル政治上及經濟上ノ利益及活動ノ集注スル自然ノ趨勢ニ顧ミ、且ツ競爭ノ結果トシテ生スルコトアルベキ紛議ヲ避ケムコトヲ希望シ、本協約追加約款ニ定メタル分界線以北ノ滿洲ニ於テ自國ノ爲又ハ自國國民若クハ其他ノ爲、何等鐵道又ハ電信ニ關スル權利ノ讓歩ヲ求メズ、又同地

域ニ於テ露西亞國政府ノ扶持スル該權利讓與ノ請求ヲ直接間接共ニ妨礙セザルコトヲ約ス。露西亞國ハ亦同一ノ平和的趣旨ニ基キ、前記分界線以南ノ滿洲ニ於テ、自國ノ爲又ハ自國國民若クハ其他ノ爲何等鐵道又ハ電信ニ關スル權利ノ讓與ヲ求メズ、又同地域ニ於テ日本國政府ノ扶持スル該權利讓與ノ請求ヲ直接間接共ニ妨礙セザルコトヲ約ス。

一八九六年八月二十八日及一八九八年六月二十五日ノ東清鐵道敷設契約ニ依リ東清鐵道會社ニ屬スル一切ノ權利及特權ハ、追加約款ニ定メタル分界線以南ニ在ル同鐵道ノ部分ニ對シ有効ニ存續スルモノトス。

第二條 露西亞國ハ日本國ト韓國トノ間ニ於テ現行諸條約及協約（日本國政府ヨリ露西亞國政府ニ其謄本ヲ交付セルモノ）ニ基キ存在スル政治上利害共通ノ關係ヲ承認シ、該關係ノ益々發展ヲ來スニ方リ之レヲ妨礙シ又ハ之レニ干渉セザルコトヲ約ス、又日本國ハ韓國ニ於テ露西亞國ノ政府、領事官、臣民、商業、工業及航海業ニ對シ、特ニ之レニ關スル條約ノ締結セラル迄、一切最惠國待遇ヲ與フルコトヲ約ス。

第三條 日本帝國政府ハ外蒙古ニ於ケル露西亞ノ特殊利益ヲ承認シ該利益ヲ損傷スベキ何等ノ干渉ヲ爲サザルコトヲ約ス。

右第一條ノ分界線ニ付テハ追加約款ヲ設ケ、露韓國境ノ北西端カラ始マリ、琿春及必爾騰湖ノ北端ヲ經テ秀水站ニ至ル迄逐次直線ヲ劃シ、秀水站カラハ松花江ニ沿ヒ嫩江ノ河口ニ至リ、之レヨリ嫩江ノ水路ヲ遡ツテ

托羅河ノ河口ニ達シ、此地點カラ托羅河ノ水路ニ沿ヒ同河ト「グリニツチ」東經百二十二度トノ交叉點ニ至ルト定メ、又公文交換ノ形式デ、蒙古ニ關スル第三條ノ規定ハ、公表協約ニ掲ゲテアル現狀維持ト機會均等ノ主義ニ何等除外例ヲ設ケルモノデハナイトノ諒解ヲ明カニシタ。

以上ノ調印ヲ終シタ後「イスヴオルスキー」外相ハ本野大使ニ向ヒ滿腔ノ祝意ヲ表スルト同時ニ、自己ノ政策ヲ實現サセル爲メニ其政敵ト戦ヘル苦衷ヲ語り、更ニ容姿ヲ嚴肅ニシテ、今ヤ吾々ハ新時代ニ入ラントシテ居ル、吾々ハ此新政策ヲ何等ノ僻見ナク衷心カラ執行セネバナラヌ、吾々ハ嘗テ公正ナ敵デ在ツタ如ク今後ハ善良眞摯ノ友人タラネハナラヌ、自分ハ之レガ履行ヲ堅ク決意シ、此精神ヲ徹底理解セシメ、總ベテノ規準ヲ之レニ求メテ誤ラサシメン爲、極メテ明確ノ訓令ヲ在外官憲ニ發遣セントス、若シ不幸ニシテ彼等ノ中我眞意ヲ理解セズシテ協約ノ精神ニ副ハザル行動ヲ爲ス者アラバ、忌憚ナク直チニ之レヲ通告サレル様切望ニ堪エヌ、ト述べ「ブランソン」ノ態度ニ關シテ縷々釋明シタ。

第二回及第三回日露協約

第一回協約ハ斯クノ如クシテ結バレタ、然シ爾來三箇年ノ經驗ニ依リ、我國ハ滿洲ニ關スル事態ヲ更ニ明確ニシ、日露ノ關係ニ一步ヲ進メルノ必要ヲ痛感シタノデ、左ノ如ク廟議ヲ決定シ、歸朝中ノ本野大使ニ交渉開始ノ内訓ヲ與ヘタ。

日露戰役ノ結果帝國ハ實際ニ於テ韓國ニ對スル主權ヲ掌握シ、併セテ滿洲ノ南部ニ於テ特殊ノ關係ヲ有ス

ルニ至リタル所、韓國ニ於ケル帝國ノ地歩ハ今ヤ既ニ確定セルニ拘ラス、滿洲ニ對スル地位ハ尙未ダ薄弱ナルモノアルヲ免レズ、日露兩國ガ南北滿洲ニ特殊ノ利益ヲ有スルノ事實ハ爭フベカラズト雖モ、兩國間ニハ未ダ明確ニ其勢力範圍ヲ協定シタル事ナキヲ以テ、兩國ノ利害ハ將來如何ナル衝突ヲ見ルコトアルヤモ之レヲ保シ難キ狀態ニアリ、其他列國ニ在リテハ滿洲ニ於ケル我特殊ノ地位ヲ認識スルコト尙未ダ十分ナラズ、動モスレバ該地方ノ現勢ヲ輕視シ、我利益ト相容レザルガ如キ事實ヲ惹起スルコトナシトセズ、之レニ加フルニ清國ニ於ケル政權ノ中心ハ確立スルトコトナク、同國政府ノ方針ハ常ニ朝三暮四ノ嫌ヒヲ免レヌ、同政府ガ將來滿洲ニ關シ我ニ對シテ執ルベキ態度ノ如キモ容易ニ之レヲ測知シ難キモノアルノミナラス、其政策ノ大體ニ於テ該地方ニ於ケル利權回收ヲ目的トスベキコトハ疑フベカラザル所ナリ。此等ノ諸原因ハ相綜合シテ滿洲ノ事態ヲ不定ナラシメ、該地方ニ於ケル帝國將來ノ地歩ヲ薄弱ナラシムル傾向ヲ有スルヲ今日ノ情況トス。

抑々滿洲ノ現況ヲ永遠ニ持續シ以テ帝國將來ノ發展ノ素地ヲ作ルハ帝國政府既定ノ方針タリ、而シテ此方針ヲ遂行セントスル爲ニハ、一面實地ニ於ケル經營ヲ進捗シ、我根底ヲ深クスルト同時ニ、一面列國ヲシテ我特殊ノ地位ヲ承認セシムルノ策ヲ講スルヲ以テ最モ急務トス。然ルニ列國ヲシテ右ノ承認ヲ爲サシメントスルニ當リテハ、先ツ滿洲ニ於テ最モ重大ナル利害關係ヲ有スル露國トノ間ニ協商ヲ遂ゲ、日露兩國ガ該地方利害ノ衝突ヲ生ズルノ端ヲ防グト同時ニ、兩國ニ關スル限リニ於テ滿洲ノ事態ヲ決定スルコトヲ最モ得策ナリトスベシ、若シ該協商ニシテ成立スルニ至ランカ、英國ハ我同盟國タル關係ニ基キ、佛國ハ

露國ノ同盟國タル關係ニ依リ、必ズ該協商ニ依リテ生ジタル新事態ヲ承認スベク、滿洲ニ於ケル帝國ノ地位ハ之レニ依リ管ニ強固ヲ加フルノミナラズ、一方滿洲問題ニ關スル列國聯合ヲ不可能ナラシメ、他方列國ヲシテ漸次我特殊ノ地位ヲ承認セシムルノ目的ニ達シ得ベク、清國モ亦此新事實ニ依リ滿洲ノ事態ガ勢ヒノ自然ニ出ヅルモノナルヲ自覺スルニ至ルベク、我既定ノ方針ヲ遂行スル上ニ於テ甚ダ良好ナル結果ヲ生ズベシト思考ス。籲テ露國ノ政策ヲ案ズルニ、同國ハ敗戰後專ラ其國力ヲ西方ニ集注シ復タ極東ニ對シ冒險的ノ行動ヲ取ルノ意ナク、加フルニ最近東歐ニ於ケル出來事ハ益々其力ヲ該方面ニ集注スルノ必要ヲ生ゼシメ、滿洲鐵道ニ關スル米國ノ提議並ニ錦愛鐵道敷設計畫ノ如キハ、同國ヲシテ益々帝國トノ親交ヲ厚クシ、以テ其共通利益ヲ保護スルノ利益ナルヲ知得セシメ、今ヤ同政府ハ帝國政府ト共ニ滿洲ニ關スル事項ヲ協定シ、從來ノ關係ニ一步ヲ進メントスル意向ヲ有シ、己ニ其意ヲ我ニ洩スニ至レリ。帝國政府ノ滿洲ニ對スル政策上、露國政府ト協商ヲ遂グルノ必要ナルコトハ如上ノ如ク、而シテ露國政府ニ於テモ亦右ノ如キ意向ヲ有スル以上ハ、帝國政府ニ於テハ大體左記ノ方針ニ據リ同政府トノ間ニ協商ヲ遂クルニ決スルヲ適當ナリト思考ス。

一、日露兩國ニ於ケル現在ノ事態ヲ承認シ、且ツ是レヲ尊重維持スルコト。

二、日露兩國ハ南北滿洲ニ於テ劃然兩國ノ勢力範圍ヲ確定シ、各其勢力範圍ニ於テ行動ノ自由ヲ有スベキコト。

三、日露兩國ハ世界ノ商業及交通ノ爲、各其鐵道ヲ改善シ、其連絡ヲ完整シ、且ツ不正有害ノ競争ヲ避ク

ベキコト。

四、日露兩國ハ滿洲ニ於ケル利益擁護ノ爲、共同ノ措置ヲ執リ、必要ノ場合ニ於テハ互ニ援助ヲ與フルヲ約スルコト。

右ノ趣旨ヲ體シテ本野大使ハ「イスヴォルスキ」外相ト折衝ヲ重ネ、出來上ツタノカ明治四十三年七月四日ノ第二回協約テ、密約ハ左ノ通りテアル。

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ一九〇七年七月三十日聖都ニ於テ調印シタル秘密協約ノ條款ヲ確實ニシ且ツ之レヲ擴張セムコトヲ希望シ、左ノ諸條ヲ協定セリ。

第一條 日本國及露西亞國ハ一九〇七年ノ秘密協約追加約款ニ定メタル分界線ヲ以テ、滿洲ニ於ケル兩國特殊利益ノ各地域ヲ劃定セルモノト承認ス。

第二條 兩締約國ハ前記地域内ニ於ケル其特殊利益ヲ相互ニ尊重スルコトヲ約ス、從テ兩締約國ハ各自カ其地域内ニ於テ該利益ヲ擁護防衛スルニ必要ナル一切ノ措置ヲ自由ニ執ルノ權利ヲ相互ニ承認ス。

第三條 兩締約國ハ孰レモ前記地域ノ界限内ニ於テ、他ノ一方ノ特殊利益カ將來益々確保増進セラルル場合ニ、何等之レヲ妨礙セサルコトヲ約ス。

第四條 兩締約國ハ孰レモ滿洲ニ於ケル他ノ一方ノ特殊利益ノ地域内ニ於テ、何等政治上ノ活動ヲ爲ササルコトヲ約ス、且ツ日本國ハ露西亞地域内ニ於テ、又露西亞國ハ日本地域内ニ於テ、孰レモ他ノ一方ノ特殊利益ヲ害スヘキ性質ノ何等特權又ハ許與ヲ求メサルヘク、又日本國政府及露西亞國政府ハ孰レモ他

ノ一方カソノ地域内ニ於テ、本日調印ノ公表協約第二條ニ掲クル條約又ハ其他ノ約定ニ依リ獲得セル一切ノ權利ヲ尊重スヘキモノトス。

第五條 兩締約國ハ其相互的約定ノ圓滿ナル實行ヲ期セムカ爲メ、滿洲ニ於ケル各自ノ特殊利益ニ共通ノ關係アル一切ノ事項ニ付、隔意ナク且ツ誠實ニ隨時商議ヲ爲スヘシ。

前記特殊利益カ侵迫セラルルコトアルトキハ、兩締約國ハ該利益ノ擁護防衛ノ爲、共同ノ行動ヲ爲シ、又ハ相互ニ援助ヲ與フルノ目的ヲ以テ、執ルヘキ措置ニ付協議スヘシ。

以上前後二回ノ協約テ日露戰後ノ兩國活動圈ハ殆ント調整サレタカ、我勢力カ南滿ニ進出スルニ從ヒ、内蒙古ニ於ケル紛争ノ種モ亦豫メ之レヲ取除イテ置ク必要ヲ感シタ、ソコテ明治四十五年七月八日、日露兩國ハ更ニ協約ヲ結ビ、四十年ニ取極メタ分界線ヲ延長スルト同時ニ、内蒙古ニ於テモ亦各自ノ特殊利益地域ヲ協定シタ、即チ兩國勢力ノ分界線ハ曩ニ定メタ托羅河ト「グリニツチ」東經百二十二度トノ交叉點カラ「ウルンチュルン」河及「ムシシャ」河ノ流ニ依ツテ「ムシシャ」河ト「ハルダイター」河トノ分水線ニ至リ、是レヨリ黑龍江省ト内蒙古トノ境界線ニ依ツテ内外蒙古境界線ノ終端ニ達スルモノトシ、又内蒙古ヲ北京ノ經度タル「グリニツチ」東經百十六度二十七分ヲ境トシテ東西ニ二分シ、西方ハ露國東方ハ日本ノ特殊利益地域ト定メ、互ニ之レヲ尊重シテ侵ササルコトヲ約シタ。

第四回 日露協約

第四回目ノ日露協約ハ大正五年七月三日ニ結ハレタ、日附ノ示ス如ク此協約ハ世界戰爭ノ眞最中ニ調印サレタノテ、其動機ハ前三回ノ夫レト全ク異ナツテ居ルカ、之レニ付テハ追テ述ヘルコトトシ、茲ニハ日露協約ノ全般ヲ瞥見スル便宜ノ爲ニ條文文ケヲ掲ケルニ止メル、無論既ニ公表サレテ居ルモノハ條約集ニ讓ツテ之レヲ複出セヌ。

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ一九〇七年七月三十日、一九一〇年七月八日ノ日露秘密條約ニ依リ定メラレタル兩國間ノ誠實ナル友好關係ヲ、一層鞏固ナラシメムコトヲ希望シ、前記協約ノ補足トシテ左ノ條款ヲ協定セリ。

第一條 兩締約國ハ其緊切ナル利益ニ顧ミ、支那國カ日本國又ハ露西亞國ニ對シテ敵意ヲ有スル第三國ノ政治的掌握ニ歸セサルコトヲ緊要ナリト認メ、必要ニ應ジテ隨時隔意ナク且ツ誠實ニ意見ノ交換ヲ行ヒ前記事態ノ發生ヲ防止セムカ爲メ執ルヘキ措置ニ付協議スヘシ。

第二條 前條ノ規定ニ依リ双方合意ノ上ニテ執リタル措置ノ結果、兩締約國ノ一方ト前條ニ記述セル第三國トノ間ニ宣戰アリタル場合ニハ、締約國ノ他ノ一方ハ請求ニ基キ其同盟國ニ援助ヲ與フヘク、此場合ニ於テ兩締約國ハ執レモ豫メ他ノ一方ノ同意アルニ非サレハ講和セサルヘキコトヲ約ス。

第三條 兩締約國ノ一方カ前條ノ規定ニ依リ他ノ一方ニ兵力的援助ヲ與フヘキ條件及該援助ノ實行方法ハ

兩締約國當該官憲ニ於テ協定スヘシ。

第四條 兩締約國ノ一方ハ切迫セル戰爭ノ重大ナル程度ニ適應スヘキ援助ヲ其同盟諸國ヨリ保障セラルルニ非サレハ、本條約第二條ニ規定スル兵力的援助ヲ他ノ一方ニ與フルノ義務ナシ。

第五條 本協約ハ調印ノ日ヨリ直ニ實施シ、一九二一年七月十四日迄効力ヲ有ス。

前記期間ノ終了ニ至ル十二個月前ニ、兩締約國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢棄スルノ意思ヲ通告セサルトキハ、本協約ハ兩締約國ノ孰レカニ於テ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一個年ノ終了ニ至ル迄引續キ効力ヲ有ス。

第十七章 大戰前滯歐四年ノ感想

明治四十二年頃ノ露國

海牙カラ明治四十一年ノ夏歸朝シタ筆者ハ翌年ノ夏露國ニ向ケ、三度目ノ海外在勤ノ途ニ上ツタ。初メテ西比利亞ヲ通ツテ聖都ニ赴任シ、此所ニ四十二年ノ春迄居タガ、其頃ハ露帝ノ權威最早失墜シ身邊モ不安ナノデ、「ツアー」ハ常ニ「ツアルスコイ、セロ」ノ離宮ニ居リ、筆者ノ在勤中聖都ニハ一度モ來ラレナカッタ從ツテ新年ノ接見モ同離宮デ行ハレ、吾々ハ雪ノ中ヲ特別列車デ出向イタ様ナ次第デ、話ニ聞イテ居ル冬宮ノ豪華ナ宴ニ列スル機會ハ無カッタガ、夫レデモ聖都ノ交際社會ハ中々華ヤカデ、夜會ハ常ニ正午過ぎ、多クハ四時五時ニ終ルノガ例ダツタ、家ノ中ハ氣持ヨク暖メラレ、美酒佳肴ニ滿チテ居ルカラ、社交界ノ人々ニハ極樂ダガ、此長イ間外ニ待ツテ居ル者ニ取ツテハ全クノ地獄ガアル。社交季節ハ無論冬故、戶外ノ溫度ガ攝氏ノ零下十五度位ノ時ハ寧ロ暖カナ方デ、二十度三十度ニ成ルコトハ稀レデハナイ。大概ノ國デハ此様ニ長ク居ル夜會等ニハ、迎ニ來ル時刻ヲ云フテ車ヲ歸ラセルノガ普通ダガ、露西亞デハ何時ニ成ロウト主人ノ歸ル迄待タセテ置ク、ソシテ供待ノ爲ノ屋舍モ無イカラ、出テ見レハ馬ハ勿論馭者ノ髭等カラ氷柱ガ下リ初メハ之レヲ見ルト何トモ云ハレヌイヤナ氣ガシテ、其殘忍サニ反抗心ガ起リ、頗ル彼等ニ同情シタガ、不